

小さい頃にやった金魚すくいを思い出します。ポイの紙がすぐに破れて、なかなかすくうことができなかつたとき、ポイを二重、三重にしてやってみたいと思っていたものです。それは、重なれば、紙は強くなり、それだけすくえる（掬える）からです。



よく耳にする言葉があります。「昔は、悪さをすれば、学校で先生から怒られ、家でも親から叱られ、地域の人からもだれかれ構わず注意を受けていた」と。

それは、この重なり（縁：繋がり：結び目）の中で、子どもが育てられていたことがわかるものです。この縁（繋がり）が子どもを受け止めていたとも言えます。下の図2のように、事象が起きたとき（赤い矢印）、それを3つの教育の縁がしっかりと受け止めていくのです。違う見方をすれば、決して大人の目をくぐり抜けることはなく、「受け皿があった」とも言えます。だから、悪さをしても、思い悩んでいても、ある意味「すくう（救う）」ことができていたのです。

図1

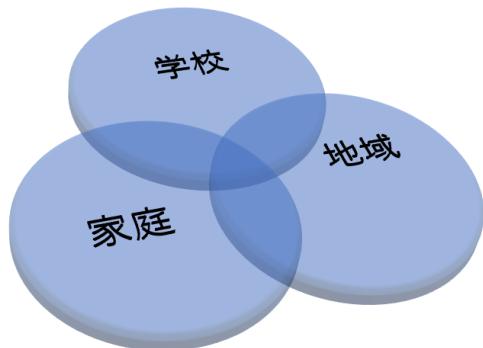
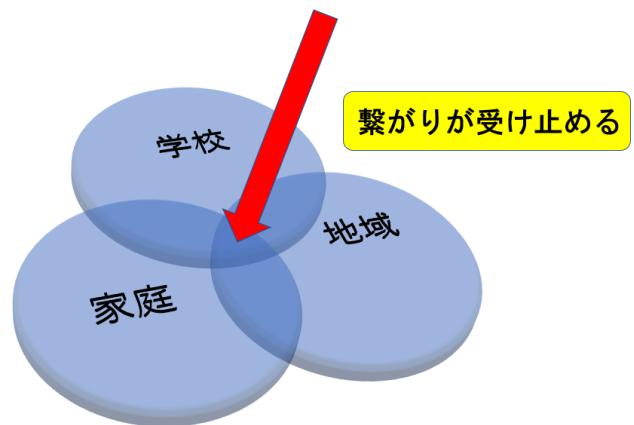


図2



一方で、「個」が重視される社会では、「集団」への帰属が薄れていきました。しだいに、三つの輪の重なりも薄れていきました。例えば、以前は、学校と保護者の飲み会は頻繁にあっていて、その分、仲がとてもよかったです。楽しい思い出がいっぱいです。また、運動会といった大きな行事の後は、一晩のうちに地域の方の家々を順番に回って、「打ち上げ」が続いていたものです。地域の中では、誰もが区や組に属していたため、誰がどの家の子どもかもわかつっていましたが、現在、他校区では、区に属さず、どんな人がそこに住んでいるかもわからない地域もあります。

図3を見てください。三つの輪の重なりがなく、空白の部分（オレンジ色）ができるています。これを敢えて「無縁地帯」と呼ぶこととします。図2と比べながら図4を見てください。何か事象が起きた時、無縁地帯では受け皿がないので、すり抜けていきます。これでは、救えるものも救えません。

図3

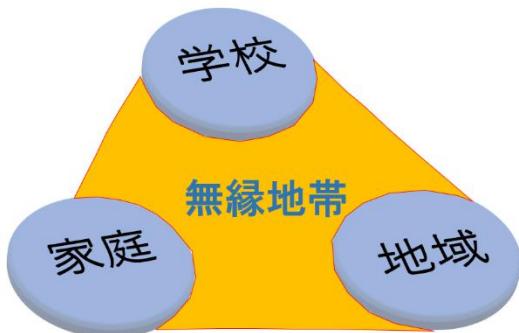
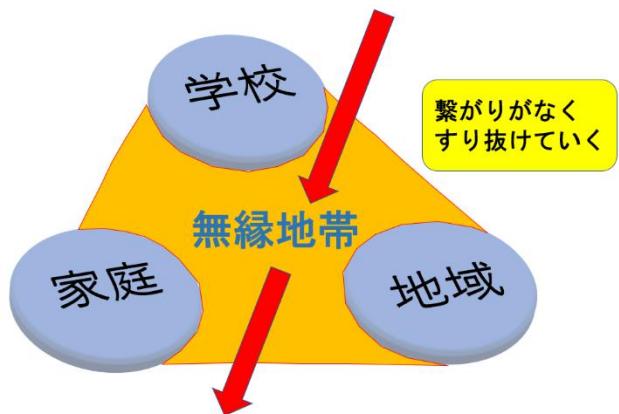


図4



時代は変わっても、家庭・地域・学校はそれぞれに一生懸命に子育てをしています。

ならば、「三矢の訓」のとおり、協力と結束により、より強固で、豊かで、細やかな教育ができたなら最高ですね。

目的は一つです。目の前の子どもたちの幸せのため。

